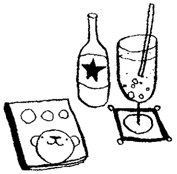

子どもの心をとらえる絵本

久保小枝子

私は「保育者として子どもたちと共に過ごす時間の中で最も好きな時間は」と尋ねられれば、迷わず「子どもたちと絵本を読む時間」と答えます。生活のさまざまな場面や、成長していく発達の段階に応じて、子どもたちは心をひきつけ夢中になる絵本に出会っていきます。

今回は、一昨年度、昨年度と担任をした四歳児年中組、五歳児年長組の子どもたちの様子から、私が最も印象に残った二冊の絵本をご紹介させていただきます。

きかんしゃ やえもん

阿川弘之文　岡部冬彦絵

岩波書店

Y男は三歳児年少組だったとき、自分のイメージで遊びを展開させながら夢中で遊んでいました。しかし、友達が一緒に遊びたいとその遊びに加わっても、Y男は保育者の媒介なしに互いの遊びのイメージを結びつけることがなかなかできませんでした。

Y男が一つ大きい年中組四歳児になると、少しず

つ友達と互いのイメージを結びつけて遊ぶことができるようになり始めました。しかし、互いにしっくり遊べないこともありました。時にY男は、自分の思いを主張し過ぎて友達との間でトラブルとなりました。私はこのようなとき、Y男や共に遊んでいる子どもたちとどうしたらいいか、どう言ったらよかったのか、共に考えるときを大切にしていました。でも、Y男は友達に言われた言葉ばかりが気になり「ああでもない」「こうでもない」と葛藤を覚えていました。「僕はこの仲間の中で受け入れられているのか」とY男が友達との関係の中で、自らの存在を問うことを始めているように私は感じました。私は、Y男が年中組になり、大きくなったことへの自信と不安が入りまじり混乱しているようにも見えました。

そんな五月のある日、クラスの集まりでの出来事です。Y男は「これ読んで」と私の膝の上に一冊の絵本を乗せました。それは『**きかんしゃやえもん**』でした。私はこの日に読もうと準備をしていた絵本があったのですが、Y男の持ってきたこの『きかんしゃやえもん』を読むことにしました。

「やえもんはいばってみせますが、だあれもあいてにしてくれません。だから、やえもんきかんしゃは、いつもこのごろきげんがわるくておこってばっかりおりました」という言葉や「しゃしゃしゃくだしゃくだ」と走り出すやえもんの姿、ほかの電車から笑われたりからかわれたりする中で自らの存在を問いながら葛藤するやえもんの姿に、Y男は共感するところがあるのでしょう。Y男は、やえもんが悔しいときに悔しい表情をし、やえもんが困っているときに「どうしよう」という表情で、弱い立場のやえもんになりきって事件のなりゆきを見守りました。そして、やえもんが喜ぶ最後の場面で、Y男は「やった。よかった」という表情で、話の結末に満足したのです。

やえもんと出会っているY男の表情から、私は子どもが精神的な成長をしていく支えに、絵本は欠かせないものの一つであると確信しました。

くわず にょうぼう
稲田和子再話　赤羽末吉画
福音館書店

五歳児年長組の子どもたちが、自由に遊んでいたときの出来事です。「始まるよ」と、R子は目を輝かせて仲間を集めます。「え、何が始まるの？」と聞き返す友達に、R子は何とも意味ありげに笑みを浮かべ「怖い怖い話」と小声で答えます。「え、怖い話？」聞いた友達の表情は真剣ですが、興味津々といった面持ちです。「怖い話。どうしよう」と言いながらどんどん子どもたちが集まります。「先生、早く」とR子から催促の声がかかります。私は床の上に腰を下ろし「くわずにょうぼう」と、この絵本の題をゆっくり読み始めました。「あ、ちょっと待って」両手で耳をふさぎながら、慌てて駆け込んでくる男の子の姿もあります。「とんとんむかしがあったそうだ」という出だしに、子どもたちは昔話の世界にスッと引き込まれていくのです。

昔、一人の男が飯を食わない女房を欲しいと思っていると、飯を食わぬ美しい女に出会って結婚するのです。ところがこの美しい女は実は鬼ばばで、男が仕事に出ている間に頭の上の大きな口へおにぎりをほうりこんでお腹いっぱいにしていたのです。男は鬼ばばの住みかに連れ去られそうになりますが、ショウブが刀となり、ヨモギが毒汁となり、男を救ってくれたという話です。

私はこの『**くわずにょうぼう**』を子どもたちに頼まれ、毎日何度繰り返し読んだことでしょう。二、三人の子どもたちと読み始めても途中でほかの子ど

もがどんどん加わり、あっという間に人垣ができるのです。途中から参加した子どもが「もう一度読んで」と言いますから、私が何度読んでも絵本は終わらないのです。私は「よし、もう一度」と子どものリクエストを二つ返事で引き受け、子どもたちとこの昔話の世界と現実の世界を行ったりきたりするのです。この絵本はなぜこんなにも子どもを魅了するのでしょうか。

一つは、「しっとり　しっとりおもたいわい」などの感覚を言葉で表現した擬態語や、実際の音をまねて言葉にした擬音語のおもしろさだと思います。回を重ねて読むうちに、子どもたちは読み手である私の声に合わせて一緒に言葉を言うようになりました。もう一つは、赤羽末吉氏の凄みのきいた絵ではないでしょうか。子どもたちは「何も食わない美しい女―何でも食う鬼ばば」という対極の絵に驚き、息をのみます。また、何よりも子どもたちをぞくっとさせるのは、女が頭の毛をばらりとほどくと、そこに大きい口が見える絵です。この絵には子どももそして私もぞくっとするようなものを感じるのです。

五歳児年長組にもなりますと四歳までとは異なり、感情的にも安定してきてむやみに恐れたりすることは少なくなります。ですから「これは絵本のお話ね」といったように現実にはあり得ないものであるということを心得ています。また、この場には三年間共に過ごした仲間が一緒にいるのです。だからこそ子どもたちは仲間と共に安心して、しっかりとした再話と巧みなストーリー展開、凄みのある絵に夢中になるのだと思います。

この夏休み、無意識のうちにいつも流れる機械的な音や人工的な色彩から離れ、たった一冊でも子どもが何度も「これ読んで」と夢中になるかけがえのない絵本に出会ってほしいと私は願っています。

（青山学院幼稚園　教諭）